江乃島紀行　釈文　２５・５・１３

第一日　江戸八丁堀〜川崎〜神奈川宿

鎌倉鶴が岡、江の島詣(もうで)の事、あまた(数多)

としおもひわたり(思)つれど、何くれと世の

ことわざしげく(繁)、また道の程もやゝ遠

ければ、心にもまかせざりしを、ことし(今年)

ばかりは何のさはる(障)事もなくて、卯月

中(なか)の八日しののめ(東雲)に出(いで)たつ。空のけしき(気色)

いと静かなり。

ねぎ事の　とし(年)をかさねて夏衣(なつころも)

けふ(今日)おもひ立　たびぞす(旅)がしき

高輪にてしばし休らふ。東海寺・海安寺

の紅葉、過にし秋見しおもかげ(面影)など

しのばれて、青葉しげれる(繁)さま(様)も見ま

ほしけれど、行先のいそぐ(急)まゝに、立も

よらず、さめず(鮫洲)・あらい(新井)が崎をも打過て、

大森なる梅園に遊び、六郷の舟渡しも

いとやすら(易)かにこえ(越)、川崎の萬年屋と

いへる(云)に立よ(寄)りて、昼の支度などとゝの(調)へ、

神奈川の井桝屋にやどり(宿)ぬ。それより

むかひ(向)なる権現山にのぼり(上)、海面はるか(遥)に

- 思いわたる：思い続ける
- つれど：けれど
- ことわざ：（事・業）出来事、仕事。
- しげく：忙しく
- 中の八日：中旬の八日。十八日の事
- （安政二年）四月十八日：新暦の六月二日
- ね（祈）ぎ事：願う事
- 夏衣：夏衣を裁(た)つの意から「立つ」などに掛かる。
- 高輪：江戸の出入り口「大木戸」があった
- 海安寺：海晏寺
- あらいが崎：古くは荒藺(あらい)ヶ崎。万葉集にも詠まれた景勝の地。新井と入不斗両村合併で入新井の地名が残る
- 六郷（川）：多摩川下流の名
- 井桝屋：井桁屋の誤記
- 権現山：現在の幸ヶ谷公園台場建設のため削られた

野毛・本牧のあたり(辺)を見れば、ゆふげ(夕餉)のけぶり(煙)心ぼそく立ち上り(のぼ)、後ざまに見かへ(返)れば、田畑もまた一つの気色なり。やゝ日も西にかたぶけ(傾)ば元のやど(宿)りに帰る。

第二日　神奈川〜関〜能見堂〜金沢

十九日晴、辰の刻近き頃、此やど(宿)りを立出(たちいで)、台の茶店を過て、浅間(せんげん)の御社(みやしろ)に詣づ。富士の人穴と云へるもめづら(珍)しし。程が谷より金沢(かねさわ)の道、まが(曲)りくゝて関といへる立場にやすら(休)ひ、山坂のけは(険)しき道を過て能見堂にいた(到)りぬ。この所の景色、筆にもおよび難しとて、いにしへ巨勢(こせ)の金岡(かなおか)が筆を捨(げ)けんも、実にこと(理)わりとおぼ(覚)ゆ。爰にふで(筆)すて(捨)の松とて大樹あり。むかし、心越禅師この所に来り給ひて、もろこし(唐国)の西湖(せいこ)の八景に似たりとて、八景の名をぞつけ(付)られしとかや。此寺の額の面、竹葉(ちくよう)の詩(うた)、其筆今に残れり。堂のかたはら(傍)に三星といふ亭あり。そこより法師の出来(いできたり)て、八景の所々見よとて、遠めがねてふ物(眼鏡貸)かしたり。

- 気色：景色
- 辰の刻：朝八時
- 富士の人穴：芝生(しぼう)村の浅間神社にあった穴。富士につながっているという伝説あり。
- 関：横浜市港南区関
- このあたりで中心的な集落、立場があった。
- 立場：宿と宿の間で休息や人馬の継立をしたところ。
- 巨勢の金岡：平安前期の貴族・宮廷画家。
- ことわり（理）：もっともなこと
- 心越禅師：江戸初期に中国から渡来した禅僧。
- 西湖の八景：西湖十景の誤り。金沢八景は湖南省「瀟湘八景」に倣って制定。
- てふ：という

これにいたく興(甚)をそへて、爰にしばし休らひ、それより立出て、道すがら君が崎一葉の松、いにしへ頼朝公の植給ひしとかや。まがり(曲)くて瀬戸橋のかたはら(傍)なる東屋(あずまや)といへるに至りぬ。今宵のやどりをこゝに定めて、さて照手姫(てるてひめ)のふすべ松とかや、その木の本に小社有。其あたりより舟に棹さし、また漁舟をも伴ひて、野島が磯、夏島の此方(こなた)にて、汐の干がた(潟)に下り立ち、はまぐり(蛤)其外いろ〳〵の貝などひろ(拾)ふに、近きあたり(辺)のわらはべ(童部)寄来て、にこやかに手伝ふ様もをかし。はや夕汐みち(満)来(きたる)べしとて、舟人のあわたゞしうさゞめくに、名残つきざれど舟にうつり(移)ぬ。彼わらはべ(童部)(かの)共に菓子などあたへ(与)、すな取(魚)舟に網ひかせつゝ(引)、ともに入江へ帰るさの左りの方(かた)に、一覧亭とて、はるか(遥)の山の上なるに上がり見れば、まことにすぐれ(実)たる所のさま(様)、筆にも詞(ことば)にもつくし(尽)難し。南ははるか(遥)に安房・上つふさ(総)の山々見渡され、浦賀の崎・猿島・

・君が崎一葉の松：内海へ突き出た君が崎にあった松。八景図などに描かれる。

・東屋：瀬戸橋南詰めにあった。江戸名所図会にも描かれた代表的な旅館。

・照手姫：伝説の小栗判官の妻

・ふすべ松：照手姫をいぶり殺すため縛り付けた松。かつては小島にあった。

・さざめく：騒々しく音をたてる。ざわめく

・すな取舟：漁(すなど)る舟

・帰るさ：帰る時、帰りがけ

・上つふさ：上総のこと

えぼし島・夏しま、海づらにつき出、
ひんがし北をのぞめば、称名の遠寺・
小泉ほのかに見ゆ。乙友・平かた・野嶋・
洲さき・瀬戸を見おろし、又見かへれば、
うち川より不二のしら雪はるかにて、
何にたとへむやうもなし。詠尽されど
日は不二の嶺にかくれ、たそがれ近しとて
人々すすむれば、この山をおりて、また舟に
棹さし、瀬戸の東屋に帰りぬ。此家の
高とのより遠目がね取出て遠近を
見めぐらす内に、日も暮はてぬれば、
燈火てらし湯あみなどす。ほどなく網もて
取得し魚など、望のまゝに物して持出し
たれば、日頃は好まざれど、盃めぐらし、
とかくしてふしどにいりぬ。

第三日

廿日晴、夫々に支度とゝのへ、辰のこくの頃に
このやどりを出で、瀬戸明神に詣づ。この
みやしろは頼朝公勧請し給ふとかや。
またびは島弁財天の御やしろに詣づ。
こは政子御前の勧請なりとぞ。蛇木と
いふ幾木ともなく生たてり。夫より金沢

- 不二：富士
- 高殿：高い建物
- 乙友：乙艫
- 物して：ここでは「料理して」
- ふしど：寝床
- 瀬戸明神：瀬戸神社。治承四年（一一八〇）、頼朝が伊豆三島明神から勧請した
- 蛇木：金沢　八銘木の一つ、江戸時代に台風で倒れた枯れ木が瀬戸神社境内に残っている。蛇混柏（ジャビャクシン）
- 琵琶島弁財天：琵琶島神社治承四年、北条政子が日頃信仰する琵琶湖の竹生島弁財天を勧請、海中に島を築いて創建。
- 金沢侯：六浦に陣屋をおいた一万二千石の大名。参勤交代で金沢道を通った唯一の大名。

侯の陣営の前より金竜院へ行。堂の
かたはらにおほきなる石あり、むかし三嶋
明神を此所に勧請せし時、いづち
よりか白幣飛来りて、此石の上にたてり。
さるゆえに飛石と名付とかや。こゝより
はるかにのぼりてひとつの詠の亭あり。
きのふ見し一覧ていとはまた八景のさま
かはりて、いとあおもしろし。

百千度　見るともあかじ　金沢や
とりならべたる　やつの名所

少しくおりて竜灯の松あり。坂をおりて
此寺を立出。左りのかた塩場有。それより
田畑の中を過て朝比奈の切通しに
かゝる。この所坂道なり。右の方に鼻かけ
地蔵とて石の像あり。武蔵相模の
さかいとかや。弘法大師の作り給ふといふ。
此峠にてしばらく休らひ、又まがりくて
麦はたを過、梶原の屋敷あと、ほゝ焼
あみだ、せん水川を渡り、杉本の観世音に
詣づ。坂東一番の札所なりとぞ。哥の橋を
わたり、えがらの天神の御社にまうづ。

・金竜院：臨済宗建長寺派の寺院。創建年代は不明
・おおきなる石：山上にあったが文化年間の地震で現在の地に落ちたという。
・ひとつの詠の亭：九覧亭。昨日訪れた亭と同じ。
・やつの名所：八景のことか。
・竜灯の松：？
・塩場：塩を作る所、かつて塩田だった所
・朝比奈の切通し：鎌倉七切通しの一つ。朝夷奈三郎義秀が切り開いたという伝説。
・鼻欠け地蔵：
・梶原の屋敷：梶原景時の屋敷
・ほゝ（頬）焼あみだ（阿弥陀）十二所光則寺の中尊を頬焼阿弥陀と呼ぶ。
・杉本の観世音：三体の十一面観音を本尊とする鎌倉最古の寺院
・荏柄天神：鎌倉の鬼門、二階堂にある古社

大とう(塔)の宮の土の牢、此所右の方、頼朝公屋敷跡、今は畑となれり。大くら(蔵)、この処町家有。筋違橋、宝海寺前、北条ならびに頼つね(経)将軍屋敷あと(跡)、鶴が岡三の鳥居前、雪の下なる大沢にてしばし休らひ、あない(案内)子を伴ひて赤橋といへる(云)をすぐ(過)。こゝに左り右にわかれ(分)て紅白の蓮池あり。右のかた(方)に嶋三つ有。その中に弁天の社(やしろ)有。いにしへ(古)は島四つ有しを、義経公八嶋出陣の折、切かたん(勝)とて一島をきり(切)崩し給ふよし。左りの白はす(蓮)のかた(方)は四島あり。池の廻り松の木なみたて(並立)り。二王門は三ッ棟づくり、此二王尊は雲慶の作といふ(云)。左りのかた(方)護摩堂、不動尊を安置せり。大山の不動尊と同じ作の由。昔平家追討のとき(時)、この御堂(みどう)にて文覚(もんがく)上人にこうふく(降伏)の祈りをせさせ給ひしに、左りの方の童子、青牛に乗給ひしが、こうふくかんおう(降伏)のしるしにや、前のひざ(膝)を折しといふ。正面神楽殿、右に大塔、五智ぼさつ(菩薩)を安置せり。同じ所にしゅろう(朱廊)、又臥竜柳あり。そのさま(様)

- 大塔の宮：護良親王。後醍醐天皇の皇子。土牢は鎌倉宮にある
- 頼朝屋敷：鎌倉初期の幕府役所（大蔵幕府）
- 頼経将軍：摂家九条家から迎えられた第四代将軍
- 紅白の蓮池：源氏池（紅）と平家池（白）
- 八嶋：屋島
- 二王門：仁王門（金剛力士を左右に安置した門）
- 雲慶：運慶
- 護摩堂：真言宗などの寺院で、護摩をたき修法を行うための仏堂。本尊は不動明王か愛染明王。
- 文覚上人：鎌倉初期、真言宗の僧
- 五智菩薩：密教で五つの知恵それぞれあてはめた五つの菩薩

いにしへはさこそと思はるれ。なほ右のかたに
姫石大明神とあがめし大石有、是を
いのる時は、こしよりしもの病を治すといふ。
夫より右のかた、社地を出て畑を過れば
寺有。門前に天正といふ年の御朱印の
制札建たり。本尊は十一面観世音を
安置せり。堂の前に由井の長者の七所に
たてしといふ塔一つたてり。其娘の七つに
なりけるが、鷲にとられて鎌倉の府の
中に七所血を落したるに、其ところに
たてしとぞいふ。此長者は北条家六代の
ころの人なるとかや。夫より尚、坂をのぼれば、
頼朝公の五輪の塔有。玉がき、鳥居は寛永
の頃、薩摩の太守より寄附せられし
よし。右のかたの坂をのぼりて、大江広元・
島津忠久の墓へまいる。また元の社地に
いりて、右の方に薬師堂有。神功皇后を
勧請せし由。若宮八幡宮の御やしろに
まうづ。此御神は仁徳天皇を祝奉る由。
もとは由井が浜に有しを、こゝに移し
奉りしといふ。此御社にて昔頼朝公の

・さこそ：さぞや、さぞかし
・思はるれ：思はるの已然形
　思われるけれど
・十一面観音：観音菩薩の変化
　身の一つ、頭部に十一の顔を
　持つ菩薩。
・由井の長者：藤原鎌足の子孫
　とされる豪族染屋太郎時忠
・七所：鷲に捕られた娘の血が
　落ちた七ヶ所
・五輪の塔：頼朝の墓
・元の社地：八幡宮境内
・由井が浜：由比が浜。若宮八
　幡宮は由比が浜から遷座

しづか(静)御前に法楽の舞を乞給ひて、義経の
行へ(方)を尋(問)とひ給ひしとや。夫より経堂
に参る。もろこし(唐国)より七千巻の経文を
奉納ありしを、八角輪蔵にをさめ(納)し
よし。こゝを出て八幡宮の石段、はゞ(巾)五間も
有べし。十間余りのぼ(上)る。左りの下に隠れ
いてう(銀杏)とて大樹あり。むかし若宮の別当
公暁(くぎょう)、伯父実朝公を親の敵とて、此いてう(銀杏)
の陰より出てうちまい(討参)らせしよし。北條
義時のはからひ(謀計)なりしとか。石段をあが(上)れば、
右に鶴亀石・影向石とて三つあり。猶
右に六角堂あり。随身門は是も雲慶
のつくり(作)といふ(云)。朱に金銀をちりば(散)め
たるみやしろ(御社)のたふと(尊)しと云も余りあり。

万代も　さか(栄)え久しき　八幡山
あふぐ(仰)もたか(崇)し　神の広ま(前)へ

廻ろう(廊)の内、若宮の神輿四つ、八幡宮の
神輿三つを置(おけ)り。鎌倉将軍以来の
宝物種々あり。御社を出て左りのかた(方)に、
あいぜむ(愛染)明王をゝがみ(拝)、夫より丸山稲荷、
此みやしろ(御社)は鎌足公勧請のよし。坂を

・雲慶：運慶

下れば頼朝公の御社有。なほ(尚)坂を下りて十二院の惣門をいづ(出)。昔は二十五ぼさつ(菩薩)にかたどり(形取)て廿五院有しが、今は十二院になりし由。右の方小袋坂をのぼり(上)て青梅聖天にまうづ(詣)。新居の閻魔(閻魔)、れい(例)の雲慶の作といふ。こゝより山の内へいで(出)ゝ五山第一の建長寺へまい(参)る。表門左りの方、長者の七塔の内一塔あり。山門を入て地蔵堂、佐山地蔵と云。本堂のうしろ(後)、庭前の池の向いに松の大樹あり。昔若宮の御神跡を此まつ(松)にたれ給ふとぞ。門を出て(いで)杉が谷弁天に詣づ。弘法大師の御作といふ。はるかに(遥)洞門を出て(いで)右の方、浄寿寺へまい(参)る。尊氏公御建立のよし。足利家十三代の御墓有と聞しかど、この日門に入事をゆる(許)さず。左りの方なる遥の山の上に、冷泉為相卿の御はか(墓)有と云。其山の麓に山の内の上杉家の屋敷有しよし、今は管領屋敷の名のみ残りてみな(皆)畑なり。右のかた(方)に矢柄地蔵尊立せ(たた)給ふ。権五郎景政の守り本尊と云。爰を過て左の方、

・たれ給ふ：もたれ給うヵ

・冷泉為相：鎌倉中後期の公卿・歌人。藤原為家の晩年の子。冷泉家の祖。

最明寺時頼のはか(墓)有。松が岡東慶寺へ
まい(参)る。表門に男禁制の札たて(建)り。此所にて
しばし休らふ。日光御山への例幣使、今宵
鶴が岡へとまら(泊)せ給ふとて、この所を過給ふ。
こゝを出て五山第二円覚寺へ参る。はる(遥)かに
のぼ(上)りて大がね(鐘)有。西洞和尚といふ人の鋳
たて(建)しといふ。本堂は釈迦如来、天竺の
かつま(羯磨)が作といふ。爰を出て五山第四浄智寺へ
参る。門の左のかた(方)に五名水の内、かんろ(甘露)水
あり。豊川御社有。北条時頼の建立と
いふ。此山をたゞに行過れば近道のよし、
小笹おし(押)分つゝ、細き山坂を下り麦畑を
過て、けはい(化粧)坂に至り、海蔵寺へまい(参)る。この
おく(奥)に弘法大師十六の井あり。その道の
かたはら(傍)に千代能尾そこぬけ(底抜)の井、また
景清の土の牢など有。源氏山を右に
見て、英勝寺を過、扇が谷(やつ)の管領屋敷に
いたる。此源氏山は、むかし義家朝臣
坂東の武者を集め給ひし所とかや。
後に伝へて白はた(旗)山、源氏山など云よし。
夫より五山第三寿福寺へまい(参)る。此山に

・「尾」は不明。

実朝公の御墓あり。巌窟にして唐
草のほり(彫)あり。此君の絵かき、ほり(彫)給ふと
いふはいぶかし(訝)。坂の半(なかば)にれいの(例)長者の
七塔の内あり。岩屋堂、浄見寺の前を
過て、若宮小路にいたる(到)。此道右の方に、
人丸姫の塚、麦畑の中に松のしるし(印)
あり。はるかに(遥)尊氏公の屋敷あと(跡)見ゆ。
是も畑なり。ゆき(雪)の下大沢へ立寄れば
日暮ぬ。灯火てらして(照)だんかづら(段葛)、二の鳥居
を過て、びは(琵琶)橋前より右へ、はせ(長谷)小路に
いたる(到)。右のかた(方)にはせを(芭蕉)翁の碑有。盛久
敷革のあと(跡)、松の古木あり。長谷の三ッ橋
屋へ戌の刻近き頃やど(宿)る。

第四日　長谷〜江の島

廿一日　晴、辰の刻過る頃、このやど(宿)りを立出、
光則寺へ参る。此寺に日朗・日親両上人
の土の牢有。日蓮上人龍の口の御難の時、
両上人および四条金吾兄弟も此所にて
禁ごく(獄)せられしとかや。牢の前なる堂に
六人の像有。門を出て左りのかた(方)、山の頂に
山王の社あり。夫より深沢の三仏へ参る。
昔頼朝公、上総国大野五郎右衛門といふ鋳

・此君：実朝のこと
・例の長者：
・戌の刻：夜八時頃
・光則寺：日蓮宗の寺院。

物師に命じて造らせ給ひしとか。堂は
政子御前の御寄進といふ。北条高時亡び
しころ、兵火のために堂は焼失て、
今はぬれ仏となり給ふ。御丈五丈といふ。
稲村がさき、長谷寺観世音へまいる。御丈
三丈三尺、春日大神作り給ふといひ伝ふ。
本堂の内に楠の手水鉢有。東山義政公
納め給ひしよし。右の方に大黒天の像
あり、弘法大師の御作といふ。本堂よりひん
がし南を望めば、由井が浜・三浦三崎の
はてまで残りなく見へ渡りて、まことに
絶景なり。坂の半に阿弥陀仏の像有、
頼朝公の御寄附といふ。夫より山坂を
こえて佐助稲荷へまうづ。此道ことに
難所なり。また三ッ橋屋へ立寄、昼の支度
とゝのへて五霊のみやしろに詣づ。権五郎
景政をまつる。眼薬を出せり。袂石・手玉
石などあり。社内名物力餅をあきなふ。
同じ所に星の井の清水あり。坂の上に
虚空蔵ぼさつへまいる。院内に宝物あま
たあり。朝比奈の切通しをのぼりて、

・由井が浜：由比が浜

浄善寺・極楽寺へまいる。天正十八年の
御朱印禁札あり。こゝを出て右のかたに、
弁慶の腰懸松見ゆ。ゑた町を左りに見
なし、坂をくだれば、日蓮上人の袈裟衣掛松
あり。十一人の塚有。程なく支度茶屋とて
三軒あり。七里が浜にいづ。右の方、横手が原
の古跡有。見かへれば由井が浜・袖が浦、
浪の向うよせかへるもいとめづらし。わらはべ
あまたむれゐて、海に入、さまぐゝのわざを
なす。あやふくもまた興あり。夫より腰越
村に至る。彦根侯御預りの所とかや。
海岸に御台場あり。満福寺へまいる。
義経の腰越状、此寺に納め有しに、僧の
住ねば、今は同じ所なる泉常寺に預りて
あり。こゝにて見侍りぬ。夫より片瀬村龍の
口山へ詣づ。院内に光りの松、うろの内に
妙見大士を安置せり。左りの方、上人の
土の牢、祖師の鋳像を安置せり。本堂は
敷革堂とあり。左りの方に七面の御社
あり。　浜辺より海面を見渡すに、風景
殊にすぐれたり。門前に四五軒茶店

・龍の口：片瀬南東部にある小字
・龍の口山

あり。こゝよりゆく〳〵真砂地にて、ふり(降)
つむ雪をふみ分る心ちす(踏)。渚に出て(積)(地)
舟渡りして江の島へ上り、恵比寿屋と
いへるにやどり(宿)を定めて、坂をのぼ(上)れば、(云)
なか(半)ばに下の宮の別当所あり。爰より右の
かた(方)に岩本院、奥の院岩屋の別当所と
いふ。随身門の前に小池あり、かたはら(傍)に、
かへる(蛙)石とて大きなる石有。坂を登りて
三重の塔有。五智如来を安置せりと云。
なほ(猶)坂をのぼ(登)りて下の宮に詣づ。慈悲上人
の開基といふ(云)。爰より左りへ廻りて上の宮に
詣づ。慈覚大師の開基とかや。此宮の
別当所有。金剛水とて頂に清浄の
水あり。こゝより廻りて茶店二三軒あり。
遠眼鏡をかけ貝細工など商ふ。夫より
原道を過て一の鳥居有。こゝに遊行上人の
成就水とて清き井あり。山二つの堺を
地震しらず(知)といふ。里の方になゐ(地震)ありても、
爰よりはたえてゆらず(揺)とかや。二三の鳥居を
すぎ(過)て岩屋の本社へまうづ(詣)。本社は修理
果たれど、拝殿はいまだ(未)事ならず。左の方に
亀石とて、自然に亀甲のあらは(顕)れたる石

あり。夫より坂をおりて海岸にいづ。此所を
児ヶ淵といふ。竜灯の松あり。尚岩山を
下りめぐりて岩屋に至る。奥深く二町
余り有しとかや。鳩数多洞の中に巣をかけて、
参詣の人になれたり。留守居の弁天とて
神体有。此所より人毎に松ともして奥に
至る。弘法大師かち水とて清き水あり。
諸神・諸ぼさつ鎮座し給ふ。奥の院は
左右共に金胎両部を祭る。日蓮上人
こし懸石などいふもあり。無明の橋少し
もどりて、胎内くゞりをぬけ、上人ねすがた
石といふも有。此岩屋は弘法大師、つむらの
湊より六字の名号をかきし舟板に
乗て此所に来り、ひらき給ひしといふ。
頼朝公御遊覧有し時、海士をめして、
貝魚などとらしめ給ひしゆゑに、魚飯
石・まな板石などの名ありとかや。こゝに
海人の集り居たるにもとめければ、やがて
うみに入、浪を分て、あはび・さゞえなど取得て
もて来ぬ。こゝより右に伊豆の山々、左りに
三崎の浦々、また沖の方に大島見ゆ。誠に

絶景なり。夫よりまた元の坂をのぼりて、奥の弁天の前にいづ。脇道を過て夕つかた、やどりに帰りぬ。その夜、雨降り出ぬ。

第五日　江の島〜藤沢宿〜戸塚宿

廿二日　小さめ小やみなし。されど海岸のさま、わすれがたく、辰の刻過る頃、又岩屋へまいりぬ。まな板石のうへ、少しこ高き所へあがるに、此時雨間なりければ、しばらく海のおもて、磯うつ浪のけはひなどながむるに、きのふ見しよりも汐高くて、この石の上残りなく、浪の打かゝれる時は、さながら白たへの中にたゝずむ心地ぞする。寄来る浪は、たゞすいしゃうもてつくれるかとおもはれ、岩のはざまにみなぎるなみは千尋の滝の落くるにぞまがふ。

あら磯の　岩ね打こす　浪見れば
　　海のうへにも　たきはありけり

爰にやゝ久しくたてれど、詠めつ■ず、やゝもあらず午の刻近き頃、残多くも帰らんとて、うしのあゆみの見かへり／／、心のこして本宮の前、上の宮より右のかた、下の宮の鳥居前にいづ。こゝにて貝の

細工物などをとゝのへ（調）、恵比寿家に立寄て、夫より島をはなる（離）。此時又小雨降り出たり。渡し場を過て片瀬村、すは（諏訪）両社の前より、同じ所の渡しをこへ（越）、石上（いしがみ）村に出て藤沢に至る。みなと屋といへる（云）にて休らふ。遊行寺へまいる（参）。開山は一遍上人とかや。仁王門を入て左りかた（方）に方丈、右なる坂をのぼ（上）れば小栗満重の堂有。宝物種々あり。主従十一人のはか（墓）、照手姫のしるし、又鬼鹿毛を馬頭観世音とあがめ（崇）、かたはら（傍）にしるし有。こゝを出て松原を過、戸塚にいたる（到）。鎌倉への追分・長いも坂（芋）・焼餅ざか（坂）などを過て、むさし（武蔵）・さがみ（相模）の堺木にて休らひ、程ヶ谷の並岡といへる（云）に夜に入てやどり（宿）ぬ。

第六日　保土ヶ谷〜田町〜八丁堀

廿三日　曇、辰の刻過る頃、やどり（宿）を出て神奈川の台にてしばし休らひ、川崎、六郷をこえ（越）て、大森なる山本にて支度とゝのへ（整）、それより品川を過、八っ山にてやすみ（休）、泉岳寺へまいり（参）、田町なる八幡の社に詣で、夕暮の頃我家にはかへり（帰）ぬ。

・田町の八幡：御田八幡
・我家：八丁堀の拝領屋敷

わが宿に　けふたちかへる　旅衣
　　ぬぎあへぬ袖に　あまる嬉しさ

（あとがき）

こは、道のゆくての口すさみ、所につけたるあそび・たはむれなど、いづれも其まことをしるし、はた、時代の跡先のおぼつかなきことゞもゝ、道の辺のひな人の物がたり、あるは何ない子どものいふまゝを書つけつ、さるは後見むをりの思ひ出にとて。

（跋文）

いにし年、李院君の木曾道中の旅日記のはし書せし事ありしに、こたび内君江の嶋詣ふでの旅日記の末に、己が文を瓢迺屋のぬしもて乞ひ給ふ。其旅日記をつらくく見侍るに、名処くの歌さへ書ひつけて、目のあたり景色を見るごとくいとくく面白う覚へける。李院君は五七五の俳句・ざれ歌の滑稽を宗（旨）とし、内君は気色をつばらに記して歌よみ給ふ。夫婦別ありのひじりの教へにかなひて、口ふたの中、むつまじき家のいやさかゆくしるしなるべし。はし書せしえにしあれば、又巻の末に文しるしぬるは、冬尾調ふ嬉しさに、老も拙も忘れて筆を走らする事しかり。

安政乙卯のとし仲夏　八十翁　朴園陳人

・旅衣：旅装束

・ゆくて：行く手：進んで行く方向。進んで行く前方。行先。

・はた：はたまた、さらにまた

・あるは：或は

・さるは：（さらに）それは、実は。

・李院：著者の夫仁杉八右衛門

・書ひつけて：書きつけて（音便）

・口ふた：口蓋　とじ蓋の意か口は「被」でかぶせ蓋か。

・冬尾：掉尾：ちょうび（とうびとも）：物事が最後になって勢いの盛んになること。また最後（を飾る）の意